

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

＜ 投 稿 ＞

(一)

△東アジア反日武装戦線△と

△非暴力直接行動△の立場

笠 田 七 尾

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

△しらせ△という言葉に象徴されるように、時代閉塞の状況が僕等を取りまいていた、そんな七四年八月三〇日の昼下がり、正に、この状況を切り開くかのように、ひとつの爆弾が日本経済の中核といわれる東京・丸の内の三菱重工ビル玄関前で炸裂し、死者八名、負傷者三八〇数名の犠牲者を出した。その犠牲者の多さもさることながら、三菱軍需廠と呼ばれた企業への決然たる直接的攻撃は、時代閉塞を味わっていた僕等に少なからざる衝撃を与えた。彼等は更に、三井物産、大成建設、間組と「植民地主義侵略企業」への爆弾攻撃を続行することによって、武装闘争の不退転の橋頭堡を築き上げた。「新左翼のこれまでのワクをはねのけた全くあたらしいテロリスト集団」とマス・コミが評したとおり、攻撃目標の設定、爆破技術、武装組織の分野において、彼等は武装闘争に新たな大都市ゲリラ△の質を提示したのである。彼等の否定的側面ばかりでなく、かかる事実を僕等は先ず正当に評価しなければならぬ。結果的に彼等△東アジア反日武装戦線△（以下△反日武装戦線△と略す。）は、七五年五月一九日、韓産研爆

破の容疑で逮捕されたわけであるが、しかし、△反日武装戦線△の拓いた闘争が、それと同時に終焉したというわけではない。勾留理由開示公判で大道寺将司氏は、行動する者にのみ許されるニヒルに裏付けられたオブティミズムに支えられながら、「第二、第三の私たち」が必ず現われるであろうことを明言した。その予告は周知の如く、爆弾闘争そのものの継続によって、△反日武装戦線△の志は新たな武装ゲリラへと受け継がれたのである。そしてそれが、一一月二一日の大阪・中之島にある三井物産ビル爆破によって、再び三菱重工ビル爆破の状況を再現したことは耳目に新しいところである。しかも、引き継がれた爆破の多くが、△反日武装戦線△を名乗るグループによって行なわれている、ということは注目に価する。

(二) さて、△反日武装戦線△を従来の武装闘争から区別するひとつに彼等の市民としての模範的日常生活がある。これは、△反日武

装戦線Vの△都市ゲリラVとしての存在態様を示す重要な点である。と僕は考えるのであるが、マス・コミは、これを一貫してスキヤンダラスにとりあげた。しかも最も集中的である。△反日武装戦線Vと△模範的市民Vの接点を捜しあぐねたマス・コミは、「やはり、悪いヤツは悪いヤツらしい顔、悪人面をしていてもらわないと、変に落ちつかない」というのである。「異常なテロをやるヤツは、それなりの異様な顔つきをしていてこそ、一般人の『期待』に沿ってくれる」(『週刊新潮』七五年五月二九日号)、そうでなければ人間不信に陥るというわけである。その視点は、△模範的市民Vが「腹腹時計」を教条的に守ったカムフラージュにすぎないという結論を導き出し、△反日武装戦線Vを自分達とは別種の人間であるとすることによって、唯々自己防衛に努めようとする。そして引いては、企業爆破そのものの本質的意味を覆い隠す役割を果たしているのである。そこには、外形上の観念でさえ破壊しようとする者を、すべて抹殺しかなない自己中心的な論理があるだけである。

△反日武装戦線Vは凶悪な犯罪者であるが故に「異様な顔つき」でなければならぬ、それ故、△反日武装戦線Vの△模範的市民Vも偽装である、とする論理の駄目さ加減は誰にでも判る。ところが△反日武装戦線Vに対するこのような陥穽は、外形上の問題にのみ留まっておらず、しかも反権力の側において、もつと複雑な形で無意識のうちに繰り返されているように思われる。

例えば、ここに「『狼』の立場と僕たちの立場」(「アナキズ」(三))

ム」9号)と題した河辺岸三氏の△反日武装戦線Vについての論考がある。論点を犠牲者の問題という一点にしぼった、もつともな内容に見えるが、しかし実は、その論考を貫くものは、先に述べた△模範的市民Vに関するものと殆ど同質なのである。

河辺氏の△反日武装戦線V批判は、△反日武装戦線Vが爆弾闘争にあたって、一般市民の巻き添えを出さない、という「そうした配慮が政治戦術を越える生き方の問題としてどれだけ真剣に考えられたか」という点に集中される。氏は、「彼らは出来る限り犠牲を出さないよう注意を払ったという。つまり、『殺さない』というモラルによって行動したと聞いている。それは事実だろうと僕も信じている」と△反日武装戦線Vに一応の理解を示しながらも、「まきぞえとなつた犠牲に対して犯罪企業の寄生虫というふうな評価の仕方、言ってみれば、ひねりつぶされて当然というに等しい評価」のある事実を指摘して、結局、△反日武装戦線Vには「『殺さない』という規範が生き方の問題として、つまり価値の問題として考えられていなかった」とする。つまり、「『狼』の『殺さない』立場は殺す権利の留保という考え方とバランスしており、犠牲者が発生した場合にそれを合理化するため枠組みはあらかじめ出来上っていたように」「見える」というのである。

河辺氏の論拠は、「爆弾で爆死したり負傷した者は『同じ労働者』でも『無関係の一般市民』でもない。植民地人民の血で肥え太る植民者である」と決め付けた「『狼』通信第一号」という三菱重工ビル爆破後に発表された△声明文Vにあると考えられるが、しかし、果たして氏のように言い切れるかどうか大いに問題がある。

ここで、△反日武装戦線▽が犠牲者の問題に如何に対処したかを、僕は行動に現われた面から垣間見たいと思う。

武装ゲリラ戦を繰り返しながら、それでもなお、△反日武装戦線▽が「無用な巻き添えなどの犠牲を出さないように作戦上配慮」していたかは、左に掲げた一覧表を見ていただければ了解できるだろう。

なお、韓産研爆破については彼等の仕業であるかどうか問題の多いところであるが、一応加えておいた。

即ち、三菱重工ビル爆破後の内部対立を通して、△反日武装戦線▽が△声明文▽の内容とは裏腹に、犠牲者の出ることを方法的に避けようとした意図を読みとることができる。つまり、三菱重工ビル爆破以降、(1)爆弾が小型化していること、(2)爆破時刻を午前〇時から三時頃の、人々が寝静まった深夜にその多くを変更していること、(3)それ以外の時間帯における爆破は△予告電話▽を掛けていること、という三つの具体的方法によってである。例外

はただひとつ、間組本社ビル爆破であるが、それでも同時に爆破した一方の大宮工場へは、やはり予告電話をしている。この△予告電話▽というものが、従来の爆弾闘争では△新宿クリスマスツリー爆弾▽を除いて無かった、という事実を△反日武装戦線▽を考えるにあたって思い起こさねばならない。行動に現われたこれらの事実は、△声明文▽以上に犠牲者に対する△反日武装戦線▽の態度を語って余りあるだろう。以上の事実を念頭に置いて△声明文▽を見るならば、河辺氏の解釈は少々酷な感じがするし、氏のように△反日武装戦線▽を裁断し切る自信を僕は殆ど持ち合わせない。あの△声明文▽は、更に武装ゲリラ戦を続行するうえで彼等自身の結束を保つための必要性からであり、本心からそう考えていたかどうか大いに疑わしい。この自己の必要性のためという立場は、河辺氏の非難して止まない政治的・戦略的立場であるかも知れないが、だからと言って△没モラル▽であるとは言えない文章を書いたことのある人には必ず経験あるだろうが、あのイキ

予告電話	死傷者数	年月日 時間	
1回	死者 8 負傷 385	74・8・30 午後0・43	三菱重工ビル
4回	負傷 17	74・10・14 午後1・16	三井物産館
なし	なし	74・11・25 午前3・10	帝人中央研究所
3回	負傷 9	74・12・10 午前11・4	大成建設本社ビル
なし	なし	74・12・23 午前3・10	鹿島建設工場
なし	負傷 5	75・2・28 午後8・5	間組本社ビル
1回	なし	75・2・28 午後8・5	間組大宮工場
なし	なし	75・4・19 午前1頃	韓国産業経済研究所
なし	なし	75・4・19 午前1頃	尼崎オリエンタル
なし	負傷 1	75・4・28 午前0頃	間組京成江戸川作業所
なし	なし	75・5・4 午前2・25	京成江戸川橋工場

ガリも大いにあったらう。もつとも、必ずしも本心からではない。八声明文を發表することによって、その見返りとして犠牲者を何とも思わなくなる心理的作用はあったであらうから、あの八声明文は八反日武装戦線にとつて危険な前兆であつたとは思ふ。しかし、八声明文を發表後の行動を検討する限り、「反日武装戦線」は、氏や僕等と同じく多数の犠牲者が出てしまつた事に心を痛め、そして、如何にして一般市民を巻き添えにせず武装ゲリラ戦を続行するか、という方法を模索しているのである。

武装闘争は原理的に権力主義に拠っているが、個人が何時でも組織から身を引ける手立てを作つておいたり、また、その武装組織が「一人一人の思想性」に依拠した組織であつたように、八反日武装戦線は自己の内部に意識的にか無意識的にか権力化への歯止めを作り出している。勿論、権力化への歯止めを持つていたからといって犠牲者の問題を歪小化しようとするのではないが、結局、河辺氏は、八反日武装戦線の苦悩の事実を無視することによって、彼等を貶めているのである。

何故八反日武装戦線が「『殺さない』という規範を生き方の問題として考えていなかった」と決めつけてしまふのか。河辺氏の、八声明文だけを根拠に八反日武装戦線の本心、本音までも割り切つてしまふ論法は、「爆弾で爆死したり負傷した者は」「植民地人民の血で肥え太る植民者である」と一面的に決め付けてしまつた八声明文のやり方と同じではないか。河辺氏の論理は、氏の拠つて立つ八非暴力直接行動から、更に八反日武装戦線へを向こうへ向こうへと追い遣る作用しかおこさない。いわば、八非暴力直接行動の排他性を僕は感じる。勿論それが、河辺氏

の意図したものなどとは思つてもいい。しかし同じく反権力の側に立つ者として、八反日武装戦線の心の動揺に思いを巡らしてやるならば、河辺氏の批判は一般的な武装闘争の論理に合致する事実箇所だけを抜き出し、理解不能な事実を切り捨てるといふ方法で論じた恣意的な内容であることが理解できるだらう。それは何故か、つまり、氏には次のような前提が最初からあつたのである。「自らの意志によらない人間の死を、あるいはもつと一般的に、自らの意志とは無関係に課される他者の苦しみを、人はいかにして正当化することができるだらうか。こういう問いかけに対して僕たちに与えられる回答は、昔から今まで少しも変わっていない。革命は必然的に犠牲を伴うものであり、犠牲は革命によつて築き上げられる自由と平等の社会の礎石となつて結実するのだ、と。こういう革命の戦略論の底には、また、犠牲こそ革命を浄化するものであるという信条が横たわっている」という大前提である。氏は、この典型が武装闘争であると暗に言い、その裏には更に、「僕たち」は違うんだという視点を持っている。

八非暴力直接行動は「殺さない」という規範を生き方の問題として考えているが八反日武装戦線は考えていない、と結論付けるための伏線があらかじめ準備されていたというわけである。

以上から分かるように、河辺氏の八反日武装戦線批判は、武装闘争に関する一般論の鋳型に八反日武装戦線を流し込んだにすぎず、その内容は、武装闘争は駄目なんだと言っているだけのことであり、そこから読み取るべきものは何もない。

また、江口幹氏は「アナキズムとテロリズム」(「アナキズム」8号)でテロリズムが現代革命に既に意味を持たない根拠として、

「大衆が自治的に行動する」「可能性が見えてきた」こと、「たとえば、市民運動なり労働運動なりが、単なる日常的な利益擁護の要求貫徹のためだけではなく自分たちで地域なり企業を、ひいては社会を管理してゆく、そういう可能性、少なくとも、そういう方向に運動を推進する可能性」ができた、ということを描けているが、それは江口氏の希望的観測というものであつて、それほど樂觀できるものかどうか。氏が市民運動、労働運動に期待するのと同じ程度に、△反日武装戦線▽は市民運動、労働運動に期待していなかったということを知らねばならない。そのことを一人一人が確認したからこそ△反日武装戦線▽は△武装ゲリラ戦▽を選択したのである。

(四)

以上、大雑把に△反日武装戦線批判▽を批判して来たが、両氏に共通して言えることは、結果的に△反日武装戦線▽を向こうへ向かうへと追い遣つてしまつてゐるということである。△批判▽というものは、そうあつてはいけない。△非暴力直接行動▽の僕等の立場から△反日武装戦線▽に対して為すべきことは、救援活動もさることながら、武装ゲリラとして閉ざされた、あるいは閉ざされかかつた視野を△批判▽を通して切り開く手助けをするこゝとである。そのひとつが、河辺氏の論点である△犠牲者の問題▽であることは間違いない。そして、その点を批判する場合、△反日武装戦線▽も犠牲者の問題に苦しんでいる、ということとを正確に押えておくことが先ず必要である。この問題を共通の基盤とした相互批判、自己批判を通して、△反日武装戦線▽と△非暴力直

接行動▽の両者が新たな闘争を展開できる可能性があるということである。それは、彼等を否定し切つてしまふことによつては決して為し得ないことである。ところが残念ながら、河辺氏の批判は、△反日武装戦線▽が犠牲者のことなど考えていない、と決め付けることによつて△非暴力直接行動▽との関係性を断ち切り、結果的に彼等を封じ込めてしまつてゐるのである。しかし実は、そのことによつて逆に氏自身の視野も閉ざされていつてゐる、ということを知らねばならない。いままでになされた△反日武装戦線▽に対する△批判▽の多くが、このパターンであつたということとは残念である。

繰り返して言おう。△反日武装戦線▽も犠牲者の出ること、出たことを是として爆弾闘争をやつたのではない。それ以上に△植民地主義侵略企業▽というものを許せなかつたのである。そこで、問題はこうあらねばならない。△犠牲者を出さずに如何にして反日武装戦線の戦闘性を維持した闘争を遂行できるか▽ということである。もし、このような闘争を僕等が提示できるならば、△反日武装戦線▽も武装に拠る必要はなからう。その闘争への可能性を僕等は△非暴力直接行動▽に求めているわけであるが、しかし、△非暴力直接行動▽が体制を揺がし得るという実力を社会的に可視化することもできず、現時点での△非暴力直接行動▽の無力さを棚上げにして押し並べて△反日武装戦線▽を批判するだけに終わるならば、体制の反暴力キャンペーンを左から補完する役割の担い手へと転落することを自覚しなければならぬ。

△反日武装戦線▽が、「われわれは新たなゲリラ兵士を迎え入れることができる。その可能性は、われわれの武装闘争によつて

生まれる」といみじくも語ったように、彼等の苦悩を救い上げ、その視野を切り開き、犠牲者を出さずに革命を遂行できるという示唆を与えることができるのは八非暴力直接行動Vそのものの社

会的実体化によってである、ということを僕は肝に銘じておきたいと思う。
(一九七六・一・二二)

クロンシュタット・イズヴェスチャ V

九号 一九二一年 三月十一日

La Commune de
Cronstadt
—Cronstadt

Izvestias —

Delibaste 1969

吉原 文明・訳

イズヴェスチャ 九号

一九二一年 三月十一日 金曜日

市民への通告

権力を党ではなく、ソヴィエトへ！

通告

臨時革命委員会は、三月二日選出された代表者に、本日十六時駐屯地のクラブに集合するよう通報した。

○議事日程

ソヴィエト再選メンバーの組織

クロンシュタットの司令官について

「ベトロバブフスク航路」「クロンシュタットの司令官」もしくは、「要塞司令部」が認めた通行証をもっている者のみに限って二三時以降の市街地の通行を認める。
何らかの部門及び省から交付された上記以外の通行証は、下記に列挙された認印を受けなければならない。

セムスコフ

クロンシュタットの司令官

戦闘報告

三月十日は、一晚中敵の大砲が北と南から強力な砲撃を続けた。